

宮澤賢治作品と戦争をめぐるって

——「鳥の北斗七星」を中心に——

張 永 嬌

(1) 「鳥の北斗七星」の刊行について

「鳥の北斗七星」は宮澤賢治がイーハトヴ童話と名付けて一九二四年二月一日に盛岡市杜陵出版部、東京光原社より出版した童話集『注文の多い料理店』に収められている九篇の童話の一つである。一九二四年一月一日に発行された「新刊書御案内」に掲載された広告文によれば、「鳥の北斗七星」は、「戦ふもの、内的感情です」と説明されている。初版は一〇〇〇部を発行したが、宣伝広告の効果も見えず、ほとんど売れなかった。宮澤賢治の高農から続けた創作活動は当時の文壇からは重視されておらず、萬田務の述べる通り「ほとんど無名な存在¹⁾」であった。

しかし、心象スケッチ『春と修羅』とイーハトヴ童話『注文の多い料理店』が出版された一九二四年は日露戦争後、第一次世界大戦後の時期に当たる。それ故、賢治作品を一種の「戦後文学」として捉え、戦争をテーマとする「鳥の北斗七星」から賢治の戦争に対する態度を探求することは可能と思われる。そこで、本論では先行研究を踏まえながら、「日露戦争後の文学²⁾」という視角から「鳥の北斗七星」を再読することを試みたい。

(2) 戦争文学としての賢治文学

西成彦は宮澤賢治作品を「戦争文学」として捉えた一人である。「イーハトヴ童話は、形を変えながら、ニンゲンと異類のあいだの戦争、もっぱらそればかりを語ろうとした、それはきわめつけの戦争文学だったのでないだろうか³⁾」と西は述べた。西はイーハトヴ童話における共通点である「ニンゲンと異類のあいだの戦争」という点に注目し、賢治作品を明確に「戦争文学」として読んだ。また、賢治の作品がこういった「ニンゲンと異類のあいだの戦争」を扱う際に、「矛盾」、「権力関係」、「暴力」、「利益関係」などが多く描写される点にも注目したい。一方、「戦争と文学」という系譜の中に、宮澤賢治の作品を入れた中山弘明は、その作品に隠された「大戦期特有」の「全体主義」への傾倒を指摘した。「よだかの星」や「銀河鉄道の夜」などでも繰り返される賢治特有の自己犠牲的理念は大戦期特有の、戦争を普遍的な「生命」や「世界」へ昇華する抽象化の理論が露骨であるとする⁴⁾。第一次世界大戦後に出た『厭戦小説』、『脱警物』、『廃兵問題』などに関する作品を「反軍小説の系譜」の中に入れ、賢治作品を「戦争と文

学」という系譜の中で捉える中山の視点は、いかにも斬新であるが、具体的な分析が足りない点が惜しまれる。また、戦後の杜陵書院版からは削除されたこの作品の受容がどう変わったかという点、またこの作品が戦後に削除されることの意味について追及しきれっていない部分もある。

一方、宮澤賢治が戦争自体をどう捉え、これをどう描いたかという問題については、先行研究に一定の蓄積がある。以下、本論に入る前に概観しておきたい。

早い段階で宮澤賢治の戦争への態度について探求した境忠一は、具体的な作品の分析を踏まえつつ、以下のように明確に論じている。

「鳥の北斗七星」は、「戦ふものの内的感情です。」とあるが、それは少佐が、マヂエルの星に祈ることばに集約されている。(ああ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいいやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません)

賢治の反戦論は、その宗教的世界観に根ざしている。⁵⁾

境は「鳥の北斗七星」に描かれる「鳥の大尉」の願いを引用して、敵を殺したくないという思いを、賢治の反戦精神として読み取った。しかし、作中にはこれと矛盾する描写もある。「鳥の大尉」は「マジエル様」(北斗七星)に祈る以前に、すでに自分の手で敵を殺しているのであり、大尉の中では殺すという実際の行

為と「殺したくない」という思いの間に矛盾や葛藤が存在している。この点は重視されるべきだろう。

一方、こうした賢治反戦論の視点から抜けて、反対側から賢治作品と戦争との関わりを捉える論も存在する。

例えば、安藤恭子は第一次世界大戦後における新たな国家間の「力」関係に注目し、「力」の構造」という入り口から、賢治作品を読み直した。安藤が指摘するのは、大戦における勝者である米・英・仏・伊・日という「五大国」が戦後処理において主導権を握っていたという歴史的な文脈である。

安藤は、大正期の雑誌『赤い鳥』からも引き継がれるこうした文脈を前提として宮澤賢治と雑誌『赤い鳥』とのつながりを論じた。賢治作品「山男の四月」に登場した「支那人像」を分析し、「蔑視すべき支那人」の像および、それと対置される「支那人」のあり方を論じる安藤は、宮澤賢治のテクストに当時の「世界図」そのものの反映を見出しつつ、日本の政治と文化を大きく変化させる「力」としての「西洋」への憧れを見た。賢治のテクストにはしばしば登場する近代文明の産物としての「電気」、「電信」、「汽車」、「鉄道」などは近代文明の一種であり、新しい世界の構造を表現したものである、と安藤は指摘する。当時の世界の動向を論じ、当時の日本の文学の場そのものと対比しながら、賢治論の新たな方向を示した。「鳥の北斗七星」にもこのように時代の構造が反映されているかという点については、具体的に探求していく必要があるだろう。

一方、西成彦は東北を植民地としてとらえ、植民地文学の一形態としての賢治文学の特性について、具体的な作品分析を通して

論じている。例えば、西によると賢治作品にしばしば登場する「北」という方は「選ばれた方位」であり、「南からやってくる到来者」に対して、北は不可逆的な変質をもたらす異界特有の作用を及ぼす」という。また西は、「月夜のでんしんぼしら」という作品を、日本軍の北上と赤軍の南下の反映として捉え、一九二〇年代における北方の緊迫した状況をこの作品から読み取れるとも論じている。また、時代背景を踏まえつつ、「北守将軍と三人兄弟の医者」の主人公である「北守将軍」についても、「西洋植民地主義の時代を支える冒険者像」として論じている。こうした西の議論は、賢治作品に出てくる「北」という方角の持つ意味を、植民地開拓と結び付けて考える可能性をさし示すものであった。

「一九二〇年代の日本の北方」における「緊迫した一触即発の状況」と、賢治のテクストにおける描写とは、どのように一致しているのか、という問題はさらに掘り下げる必要があるだろう。作品に描かれた激しい戦争場面と登場人物との関係を捉え返すことで、賢治の戦争思想に対する理解は深まるはずである。

さらに、押野武志は植民地主義の視点から宮澤賢治の作品を論じた。押野の議論は、アジアを植民地化することによって国際社会の中での地歩を固めた大正期の日本を生きた宮澤賢治が「明らかに植民地主義的想像力と共鳴している」点について批判的な考察を展開するものである。

吉田司の『宮澤賢治殺人事件』（二〇〇二・一、文春文庫）もまた、近年における賢治に対する批判的な議論の一つである。吉田は「高等遊民」としての賢治の身分と、彼のいかにも現実と離れていた農業活動について、具体的に分析を行い、賢治が生涯に

わたって、己れの育った〈質屋体質〉から脱け出ることにはなかつたと論じた。さらに、吉田は賢治と国柱会の関わりを原点にし、彼の作品の所謂「自己犠牲」に当時の戦争に関する風潮のみならず、彼の心酔した国柱会の国粹主義と深い関係があることを論じた。

近年では、大澤信亮が宮澤賢治と「暴力」を明確に結びつけて論じている。大澤は、賢治の「人類全体の幸福を願う文学」への志向と「他国の人間を殺すという矛盾した現実」⁵との相剋を論じているが、宮澤賢治の中にある「過激な自己犠牲心」と「不自然な過剰さ」について、国柱会とその創立者・田中智学からの影響を具体的に見た。大澤は賢治の書簡から、彼の作品と作家の人生を視野に入れつつ、「智学によって引き出された賢治の暴力性」と結びつけて論じていて示唆に富むが、戦いを内容とした作品「鳥の北斗七星」について具体的な分析を行ってはいない。また、暴力の一番激しい局面とも言える「戦争」に関する賢治の態度について、必ずしも十分には追及し切れていない憾みがある。

先行研究を纏めると、賢治作品と戦争についての論調は全体的に少ないものの、近年の賢治研究が「人間愛」、「自然愛」、「仏教思想」など賛頌の観点から脱却し、宮澤賢治と「戦争」を結びつけて論じる機運は高まっている。しかも、反戦論という観点から賢治を評価するだけでなく、「権力」、「諷刺」、「暴力」などの視点も入れながら賢治作品を批判的に読んだ研究も登場してきている。これらの論調は賢治研究の新たな視点を示してくれたが、「宮澤賢治と戦争」というテーマについて論じ切れていない部分はまだある。本論は「戦争」と「ポストコロニアリズム」をキー

ワードにして、作品論を方法の中心として宮澤賢治の「烏の北斗七星」を読み直したい。作品中に出た戦いの主体と彼らの感情などを分析することによって、当時の時代背景と関連しつつ、宮澤賢治の作品と戦争、そしてポストコロニアリズムとの関係を明らかにしたい。

(3) 登場人物における関係性

「烏の北斗七星」に描かれるのは、烏の義勇艦隊と山鳥の間の戦いである。テキスト内での呼ばれ方からも明らかのように、一方は烏が組んだチーム（「義勇艦隊」）であるのに対し、もう一方（「山鳥」）については、組織の存在が示唆されていない。

まずは、両者の具体的な特徴を見てみよう。烏の義勇艦隊については、以下のような描写がある。

そこで大監督が息を切らして號令を掛けます。「演習はじめいおいつ、出発」

艦隊長烏の大尉が、まつさきにはつと雪を叩きつけて飛びあがりました。烏の大尉の部下が十八隻、順々に飛びあがって大尉に續いてきちんと間隔をとって進みました。(六七頁)

大砲をうつとき、片脚をぶんとうしろへ挙げる艦は、この前のニダナトラの戦役での負傷兵で、音がまだ脚の神経にひびくのです。(六八頁)

「があ、艦長殿、點呼の時間でございます。一同整列して居ります。」

「よろしい。本艦は則刻歸隊する。おまへは先に歸つてよろしい。」(七一頁)

「ギイギイ、ご苦労だつた。ご苦労だつた。よくやつた。

もうおまへは少佐になつてもいい、だらう。おまへの部下の叙勲はおまへにまかせる。」(七九頁)¹⁰

以上の内容から分析すると、烏の義勇艦隊には以下の特徴がある。①戦艦と呼ばれている各鳥の上から下までの所属関係が明確である、②各戦艦が命令に沿って行動する、③秩序がある、各戦艦が規律を守っている組織である、④観兵式などの儀式がきちんとしている、⑤作戦経験があり、戦功による叙勲などもある、⑥戦争の前に各戦艦が自分の利益を犠牲にし、団体全体の利益を求める。まさに人間の軍隊に似た組織である。宮澤賢治はメタファーとして烏を用いているのだと言えよう。

ところで、作中に登場する人間はどのように描かれていただろう。作品中には、一人の子供が登場する以下のような場面がある。

それですから、烏の年齢を見分ける法を知らない一人の子供が、いつか斯う云つたのでした。「おい、この町には咽喝ノドのこはれた烏が二疋あるんだよ。おい。これはたしかに間違ひで、一疋しか居ませんでしたし、それも決してのどが壊れたのではなく、あんまり永い間、空で號令したために、すっかり聲が錆びたのです。それですから烏の義勇艦隊は、その聲をあらゆる音の中で一等だと思つてみました。(六六頁)

「鳥の年齢を見分ける法を知らない」子供は鳥の世界にある秩序を破った。破ることによってかえってこの関係性を強調した。

ここから出発すると、人間世界の軍隊を鳥の艦隊で隠喩する意味を更に探求する必要がある。所属関係が明確になっている「鳥の義勇艦隊」で「大監督」は一等と思われる。即ち、「上位」に在る存在である。また、「艦隊」は「観兵式」、「点呼」などの活動を決まった時間に行っている。これは規律を維持すると共に、数を確認するために行われたことである。一方、人間である子供は一疋か二疋かということすら間違えている。「鳥の世界」と「子供から見る鳥の世界」との対比でその矛盾が分かる。人間の子供は、「鳥の年齢を見分ける法を知らない」、即ち「上から下までの明確なる所属関係」を認識していない。また、「大監督」の「ギイギイ」という声は、「あらゆる声の中で一等」であり、「鳥の義勇艦隊」において最上位の存在であるにもかかわらず、「人間」である「子供」の目には「咽喝のこわれた」一疋の鳥としか映らない。さらに、「鳥の義勇艦隊」は人間の義勇艦隊と同じような組織性を持っているが、人間から見れば、「鳥の義勇艦隊」や彼等の「戦争」は意味の分からない鳴き声でしかない。このアイロニーは、賢治が「戦争」の本質を洞察していたということの意味するのではないだろうか。

この作品には、ほかに「山鳥」が登場する。

「戦闘艦隊長のはなしでは、おれはあした山鳥を追ひに行くのださうだ。」

「まあ、山鳥は強いのでせう。」

「うん、眼玉が出しやばつて、嘴が細くて、ちよつと見掛は偉さうだよ。しかし譯ないよ。」

「ほんたう。」（七〇頁）

ここにもう一つの対比が存在している。「鳥の義勇艦隊」と「山鳥」の対比である。きちんとした組織である「義勇艦隊」は数も装備も遙かに「山鳥」より優勢である。「大尉」の話によると、「山鳥」は自分たち「鳥」とは外貌が違っている、ほかの種類鳥である。更に、「大尉」の話し方には優越感が感じられるが、ここに表れているのは「山鳥」に対する差別的視線に他ならない。艦隊の中に上位と下位の関係が存在していると同時に、同じ鳥類の中で「鳥の義勇艦隊」は「山鳥」より上位に在るのである。

こうした差別的な視線は、まさにポストコロニア研究が扱う問題領域そのものである。ここでは、毛利嘉孝がポストコロニアリズムについて述べた以下の言葉を参照しておきたい。

「ポスト」という接頭語は、「次の」とか「より後の」という意を持つが、必ずしも時間的な前後関係を示すだけではない。ポストモダンリズムという語の用法もそうなのだが、ここには批判的な意味合いが含まれており、いまだにコロニアリズムが終わっていないということを逆説的に示す語でもある。

もちろん、コロニアリズム（植民地主義）は、狭義の政治的制度としては第二次世界大戦とそれに続く旧植民地国の独

立によって終わつたと考えられるのかもしれない。しかし、植民地主義が一見制度的に終わっているのに、なぜ依然として貧富の差は拡大し、搾取や差別や暴力は継続しているのだろうか。コロニアリズムは負の遺産はまだまだいたるところに偏在し、ひよっとしたらさらに負のスパイラルを描いているのではないか。¹¹⁾

毛利の述べる「搾取や差別や暴力」の問題は、まさに「鳥の北斗七星」に描かれたものである。宮澤賢治が生きた時代とは、資本主義発展と植民地の開拓が急速に進行した時代に他ならない。そうした時代の中で、宮澤賢治はまさに彼の生きていた現実世界の一つの反映として作品世界を構築しているのである。

ここで視点を変えて「義勇艦隊」の時代性を見てみよう。作品の挿絵から見ると、「一疋の鳥」、「北斗七星」、「山」が描かれている。作品内容を関連すると、この「一疋の鳥」は「北斗七星」に祈願した「大尉」と思われる。さらにこの「一疋の鳥」の服装を注目してみると、この鳥は和服ではなく、西洋風の軍服を着ている。それに「日本刀」ではなく、西洋刀を持っている。そして「鳥」とは言え、西洋風の軍装から出た頭だけが鳥の頭になって、それ以外の身体部分は「人類」と全く同じと言える。人間とは別の存在として描かれていたはずの鳥が、ここではわかりやすく擬人化されており、アイロニーの技法が一層に顕著である。ところで、明治初年から始まった徴兵制の起源を確認すると、日本の徴兵制が西欧から強い影響を受けたことが分かる。徴兵制の起源について加藤陽子は「徴兵制についての知識は、明治初年

の諸制度がみなそうであったように、西欧の事例を急速に学んだ結果によるところが大きかった」と述べた。この状況は大正に入っても変わりはなかった。さらに大正に行つた第一次世界大戦の後、植民地を獲得する競争が表面化になった。この競争で利益を獲得する為に、日本は富国強兵を実行し、西欧の制度を学ぶ傾向が深まる一方であつたと言えよう。

宮澤賢治の作品には権力関係や利益関係が表れた設定が多く見られる。現実世界の傾向と同じように「西欧」を上位に置き、資本主義上昇期の時代的な影響を受けている。しかし、決して賢治は資本主義の発展、および日本の発展中に生じた「西欧中心」の

挿絵—宮澤賢治 イーハトヴ童話『注文の多い料理店』

(一九二四年・二二、杜陵出版部、東京光原社)
『名著復刻全集』、一九六九・四、近代文学館、七六頁



思想に全部賛成しているわけではない。故に、不協和音である「子供」という存在がいる。このことは、先に確認したとおりである。

こうしたことは、賢治作品によく描写されており、梅原猛は賢治作品に出てくる「諷刺精神」について「宮澤賢治の批判精神は現在地球上を支配しているヨーロッパ文明に対する東洋的な慈悲の精神からの強烈な批判なのである」と論じた。梅原の述べた「ヨーロッパ文化を採用する人間」は当時の日本人のあり方そのものである。宮澤賢治もその影響を受けつつ、「義勇艦隊」に西洋軍の特色を持たせた。E・サイードの言う「オリエンタリズム」は、賢治作品にも顕著に見出される特徴である。

東洋に関する知識の概括的見出し語のもとに、また十八世紀末以来の東洋に対する西洋の覇権の傘の下で、アカデミーにおける研究、博物館の展示、植民地省の再編、人類と宇宙に関する人類学的・生物学的・言語学的・人種的・歴史的命題の理論的解説、開発・革命・文化的・パソナリティー・民族的または宗教的特質に関する経済学的・社会学的理論の実例など、これらもろもろのいずれにも適合するひとつの複合体としてのオリエンタが出現した。さらに、想像力がオリエンタル的事物を吟味する場合には、多少なりとも排他的に統治者たるべき西洋の地上性の意識を土台としていた。

賢治作品もまた、サイードの述べた一種の「想像力」の産物であり、「統治者たるべき西洋の地上性の意識」が表れている。所

謂西洋をオリエンタとの位置関係を設定する際に、賢治の想像力はどのように発揮されたか。そして作中の不協和音として登場する「子供」による「諷刺」の意味は何であるうか。これらを明らかにする為に、作品中の登場人物の関係性についてさらに探求していく必要がある。

(4) 関係設定の深層

「山鳥」の生存地に関して語り手は「山から出て来」たと述べた。地理的に分析すると、「鳥の義勇艦隊」は平原に位置しており、山鳥は山に住んでいる。挿絵からも分かるように、この平原は「大監督」と「大尉」が統治している「義勇艦隊」の占領地と言える。山も空も星も背景のような存在で、「義勇艦隊」こそこの土地に中心的な存在である。このような優れた環境に住んでいた「大尉」の側から見れば、「山鳥」は自分たちより「劣等」な存在である。この優劣関係は、地理的なものであると共に、種に関するものでもある。登場する鳥たちが人間世界に関する一種の比喩であるとすると、「鳥」の間にある差別的なまなざしは人類世界における「人種差別」に関する比喩であると言える。そして、この優劣の関係はまさに人間世界の「植民地における他者へのまなざし」そのものである。

この作品が書かれた同時代における日本の状況を参照するならば、例えば日本統治時代のパラオの「島民」が、このようにまなざしの対象となったことなどが想起される。この問題について、三田牧は以下のように論じている。

まず、教育行政文書に見られる「島民」へのまなざしが、(中略)パラオの子どもたちに「島民」としての負のアイデンティティを植えつけるという意味で、「人間」を「島民」化していく教育だったと考えることもできよう。教員たちは、日本語を教授することでパラオ語を「島語」として貶め、日本中心的歴史感覚、日本中心的地理感覚、日本中心的忠誠心などを教授することで「パラオ的なもの」を「日本的なもの」の劣位に押しやっていた。¹⁵⁾

三田が述べるように、植民地化されたパラオは日本の「劣位」に押しやられていた。同じように作品中の鳥類世界で「山鳥」は「義勇艦隊」から劣位に押しやられている。こうした「山鳥」への差別的なまなざしの存在は、「山鳥」が無言の存在として描かれている点からもうかがわれる。

「鳥の北斗七星」における「山鳥」は、ずっと無言のままの存在である。「義勇艦隊」の砲艦の声、大監督や大尉の号令、艦の点呼などについての描写と比べると、明確なる言葉の有無の差が分かる。「義勇艦隊」の鳥たちは、「山鳥」たちの言葉を聞き取り、理解することができないのだ。

このことは、現実世界における強い文明から弱い文明への威迫と似ている。例えば、十九世紀後半に、西欧化、ロシア化されたオヴフ族の人口が大幅に減少したが、この徐々に滅びゆくオヴフ族について、金子遊が「無文字社会であるゆえに、消えていく運命にある言語や伝統生活」と論じたことなどが思い合わされると

ころである。

さらに、「大尉」の夢に「山鳥」は「義勇艦隊」と似たような服装と武器を持って登場してきたが、それは「山鳥」の側から積極的に「義勇艦隊」へ「近づく」ということである。しかし、大尉は「山鳥」から握手を求められたにもかかわらず、それを拒否してしまふ。

同じ服装を着たり、同じ武器を持ったりすることで、鳥同士は同じような外貌を有することができる。しかし、それでも「大尉」から山鳥を認められないのは、そこに利益の上での矛盾があるからではないだろうか。このことは、先に参照した日本統治下のパラオにおける教育とその結果と同質の問題、すなわち植民地主義の問題そのものである。

日本人を「文明／優」とし、日本人から異質であればあるほど「未開／劣」とするまなざしをパラオの子どもたちが共有していたことを示している。

学校においてパラオの子どもたちは、「日本人らしさ」を身につける教育を受けた。そして日本人らしさの希薄な「周縁的な日本人」を軽視することもあった。しかしそれは同時に、いかに日本人らしく振舞っても決して日本人になれない自らの限界を再確認することでもあった。パラオの子どもたちは、日本人の「まなざし」を内在化することで「日本人らしくない日本人」を軽蔑すると同時に、肌の色など身体レベルで既に日本人らしくない自らを「島民」として認めざるを得ないという、負のサイクルにとらえられてしまっていた。¹⁷⁾

植民地化されたバラオの子どもたちが憧れた「日本人らしさ」とは、「山鳥の変装」を想起させる。すなわち、強者である「義勇艦隊」への憧れである。

結局「大尉の夢」の中で、変装した「山鳥」の存在は拒否される。そして、実際の戦争において「義勇艦隊」から殺されてしまう。西欧の暴力的な資本主義の世界に参入した日本が、南洋やアジアにおいて他の国々に対して暴力を行使する。宮澤賢治は日本のオクシデント（西洋）化の過程を理解した上で、日本の発展における暴力性について考えたと思われる。所謂梅原猛が言うところの「殺害精神」¹⁸である。「賢治は近代文明の深奥を見つめていた人のように思われる。近代文明の奥には人間中心主義の殺害精神が宿っている」と梅原は賢治について述べた。

そして、そうであるならば、作中に描かれたいかにも西洋風な「義勇艦隊」について、外側から否定的に語る「子供」の存在は、「西洋中心主義」から脱出の仕方を示唆するものである。

しかし、鳥たちがこの近代文明の奥に宿っている「殺害精神」から完全に脱出することは出来なかつた。続いて、「鳥の義勇艦隊」と「山鳥」の間で行われた戦争の中で、その「殺害」が具体的にどのように設定されたかということについて注目しよう。

(5) 義勇艦隊と山鳥の戦争について

「義勇艦隊」と「山鳥」の間に起こった戦争は、最初に「大尉」が許嫁である「砲艦」に伝えるところから描写される。「大尉」

は戦争のことを許嫁に教える時、「戦闘艦隊長のはなしでは、おれはあした山鳥を追ひに行くのださうだ」と言っているが、「…のださうだ」という伝聞表現から考えるに、「大尉」は自身に下される命令の詳細を作戦直前まで知らない。作戦内容について決定権を持っていないけれども、「大尉」はすでに作戦準備をしている。また、このことは命令を受ける姿勢にも見られる。「大尉」の「山鳥」に対する態度は夢の後の心の声にも分かる。「あしたの戦でわたくしが勝つことがいゝのか、山鳥がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません、たゞあなたのお考のとほりです、わたくしはわたくしにきまつたやうに力いつぱいた、かひます。」（七五頁）という内容がある。「大尉」の中には、「わたくしが勝つ」か「山鳥が勝つ」か、という二つ以外には選択肢がないという意味も読み取れる。決められたことだから、分からなかつたとしても、これ以上考える必要がない。

鳥の戦争について佐藤通雅は「戦争とは敵、味方の存在なくして成り立たないはずなのに、大尉にとって山鳥は敵と意識されていない。それどころか生きものとして同胞¹⁹であ」と論じた。「大尉にとって山鳥は敵と意識されていない」という佐藤の指摘は興味深い。戦争や殺害は客観的に発生したことに對し、「敵」意識というのはこの出来事への態度とは言えよう。即ち、主観的なことである。しかし、あらゆる命令を受ける姿勢を持つ「大尉」にとって、彼の「主観」は客観である「命令」には影響を及ぼさない。「山鳥」を「敵」として見ても見なくても戦争や殺害を依然として行う。

この時、賢治が作品中に多く描写した鳥たちの「内的感情」の

意味とは何だろうか。「敵」意識がはっきりしないことで「戦争」への認識も薄くなる。さらに、「戦ふ」ことから「内的感情」へと注目を移転させることも出来た。視点の移動で責任意識も他所へ転嫁させたのではないか。

こうした現象は、宮澤賢治が亡くなった後に起こった日中戦争において、実際に生じたものでもある。加藤陽子は当時の日本人が中国人を「戦争相手」として見ていなかった点に関心を持ち、「戦争なのに戦争相手として見ていないことに驚いたし、当時の日本と今のアメリカに一致点があるなんて意外でした」と述べている。さらに言えば、「東亜一体」という名義で行われた日中戦争は、国柱会が宣伝した「世界統一の天業」と一致している。大澤信亮や吉田司が論じたように、宮澤賢治と国柱会の深い関係も想起させる。

「鳥の北斗七星」が発表されたのは一九二四年二月一日である。賢治は一九二〇年二月二日に友人である保阪嘉内への手紙に「今度私は国柱会信行部に入会致しました」と記し、その後「世界統一天業」を入会勧誘の手紙と一緒に保阪へ出した。一九二二年の一月三〇日に賢治は関徳弥宛の手紙において「私の国柱会への感情は微塵もゆるぎはいたしません」と述べた。二月にまた父である宮澤政次郎に勧誘の手紙を出し、「天業民報」を一緒に送った。彼は「世界統一天業」を正当化しようとした国柱会を夢中で信じていた。作品世界でも「鳥の義勇艦隊」が行った「戦争」を正当化しようとした。その正当化の一つの手段としては「敵」や「戦争相手」といった意識をはっきりさせないことであろう。そして、その「戦争」が発生する原因を見ると、「お腹が

空いて山から出て来て、十九隻に囲まれて殺された、あの山鳥」(五〇頁)といった表現からも分かるように、「山鳥」からの威迫は食べ物奪い合いについてである。「義勇艦隊」は、「山鳥」の存在を生存上の脅迫として感じたのだろう。その意味で、この戦争は「鳥の義勇艦隊」の指揮者がグループの利益を守るために起こしたものである。参戦者としての「艦」は悲しい感情も表すけれども、最終的には自分のグループの利益のために敵として「山鳥」を殺す。所謂「殺害精神」である。

(6) 戦争中の矛盾について

「戦ふもの、内的感情です」と賢治はこの作品の広告文に書いた。実際、作品中で目に付くのは、敵である「山鳥」に対する様々な「内的感情」である。「戦い」と無関係の「感情」が過剰に表れることについては既に大澤による指摘があるが、こうした過剰な「感情」に関する記述は、後年、この物語を手にも本場の戦場へ向かい、亡くなることになった戦没学徒兵の佐々木八郎を共鳴させた。

佐々木八郎は宮澤賢治の「鳥の北斗七星」を熱心に読んだ感動を一九四三年六月二六日(土)の日記に、「宮沢賢治の『鳥の北斗七星』『祭の晩』を読む。何とも言えない。すばらしい。美しい」と書いた。後年、賢治研究者たちは佐々木の日記を引用しつつ、これを根拠に賢治文学における反戦の性質を論じることになる²⁰。戦場に赴いた佐々木のような学徒兵が、そこで賢治作品を読むという行動をとることの意味は大きい。彼らは「相手」と「自

「己」が敵と味方として対峙する「戦場」において、自分がこれから「戦場」においてなすであろう「行為」について、考えないではいられなかつたはずである。

戦場における読書行為について研究している中野綾子は、以下のように述べている。

つまり、戦場において求められた読書行為は、知識ではなく、感受性の豊かさであり、それをほかの兵士と共有することであった。「感情」に読書行為の結果を求めることによって、インテリであることはある程度隠蔽される。それは、学生兵に纏わる不安に対する戦略でもあり、軍隊という階級性が反転されてしまうような共同体に対しての攻略条件であった。読書行為が知識ではなく、精神としての豊かさを象徴することになれば、その精神の持つ学徒兵は尊敬を集める⁽²⁴⁾。

中野の述べたように、学生兵の読書行為は軍隊で「尊敬を集める」ことになる。つまり、「読書」は「精神としての豊かさを象徴する」行為として戦場に持ち込まれた。それは「戦争」そのものと無関係の行為として戦場に持ち込まれるのである。そして、そのような読書行為の対象として、「鳥の北斗七星」は選ばれていたことになる。

「鳥の北斗七星」の中に、「義勇艦隊」に関する以下のような描写がある。

鳥の義勇艦隊はもう総掛りです。みんな急いで黒い股引を

はいて一生けん命宇宙をかけめぐります。兄貴の鳥も弟をかばふ暇がなく、恋人同志もたびたびどくぶつつかり合ひます。
(七三頁)

ここに描かれているのは、中野も述べているように「階級性が反転されてしまうような共同体」としての「軍隊」の様子である。実際に戦場に行くと、兄弟や恋人などとの関係は意味を失い、エリートと知識を持つていない人の格差も重要ではなくなる。戦争や殺害に対する「感情」だけが、そこでは共有できるものである。しかし、この感情はグループ内部のもので、規律を守る意識、敵との対立関係、それに戦う決意などを改変することは出来ない。逆に、色々な人間の感情を描写することにより、戦争を「美化」し、戦争中の判断をなくさせる。

実際に戦場に行った火野葦平は戦場から弟宛ての手紙を出した。中には、戦場での「敵」に対する複雑な「感情」について「あまり似過ぎていて困ることである」、「どうも我々とよく似ていて、隣人のような感がある、ということは、一寸厭な気持である」、「そういう話をしたことをおもいだしただけだ。解決の方法など考える気もしなかった」⁽²⁵⁾などの内容が書かれた。これらの内容からも分かるように、実際に戦場に行った兵士は「鳥」と同種である「山鳥」——「憎むことのできない敵」と戦争をしなければならぬ。「解決の方法」を考えるのを避けて、「敵」を殺し続けることが求められるのである。

さらに、「義勇艦隊」と「山鳥」との戦争中に使われている戦術にも注目したい。先ず忘れてはいけない点は数の差である。

「鳥」は「大尉」と部下の十八隻、そして「砲艦」が直接戦いに参加した。一方、「山鳥」の方は一正しかない。軍術というところ、「突貫」、「鋭く」、「もう一突」であった。一見すると、厳密で秩序のある作戦だが、実を言うと不公平な数から、鋭い作戦まで「勝」のための戦いでしかない。

挿絵からこの戦争を考えると、挿絵の中の「鳥」は軍功のあるはずの大監督でもなくて普通の兵士でもない。主人公である「大尉」を描いたものである。「大尉」一人が図にあつて、しかも図の枠から頭を出しており、この構造から「鳥」としての「大尉」を強調していることが分かる。挿絵で組織内のほかの艦が省略されているのは一種の個人主義の表れである。それに服装と武器から「大尉」の「偉大さ」が感じられる。特に北斗七星が図の枠に小さく見えるのは、「大尉」が「北斗七星」と戦争の局勢を把握していることを表している。同じ意味でタイトルは「鳥の北斗七星」になっている。「鳥」を守っている「北斗七星」と言うより、「鳥」が願ったとおりに守ってくれる「北斗七星」である。大尉は「北斗七星」へ祈願する前に、既に「山鳥」との対立を認め、「山鳥」を殺す決意を持った。「大尉」の祈りは、「敵を殺した」という行為に伴う責任を転嫁する手段ではないだろうか。

一方、「北斗七星」に相当するはずの星がわざわざ「マジエル様」と呼び変えられる意図も興味深い。賢治の使用した「マジエル様」という言葉は「北斗七星」という呼称が通用する漢語圏の外へ脱出し、世界中という広い範囲を念頭に入れつつ書き換えられたと考えられる。さらに、「大尉」の祈りより、自分が生存している世界より、新たに変貌した「世界」が望ましい。賢治

作品中のこの新世界を構築する願望は国柱会信者としての「世界統一天業」という信仰の表現と言えよう。鈴木健司は宗教的な視点から「殺された山鳥側にとつての「マジエル様」の位置付けが明か出来ない以上、鳥の「義勇艦隊」と山鳥との対立は、軍事的にであれ宗教的にであれ、「マジエル様」への祈りによつて解決されることは決してないのである。これは或る意味で、「法華経」ならぬ「マジエル様」による世界統一に他ならない」と分析した。鈴木述べたように、「大尉」が祈った新しい世界は「マジエル様」による統一した世界である。皮肉にも守護神であるはずの「マジエル様」は、「山鳥」の命を救うことができなかった。

(7) まとめ

本論文は、宮澤賢治作品に表れた「矛盾」、「権力関係」、「暴力」、「利益関係」に注目し、これらの一番激しい表現である「戦争」を取り上げ、「賢治作品と戦争」について論じたものである。「戦争文学」として賢治作品を捉える可能性を論じつつ、先行研究を考察した。近年に視点を広げ、「宮澤賢治と戦争」を再読した研究者が増えたが、論じきれない部分はまだあると感じられる。そして本論は「戦争」と「ポストコロニアリズム」をキーワードにして、「戦争」を主題とした「鳥の北斗七星」を再論したものである。

「鳥の北斗七星」に登場した人物の関係について探求したが、「西洋を上位に置く」という設定を分析した。さらに、作品中の「戦争」は「功利主義」によるものであることも論じた。「内的感

情」によって判断を中止させ、戦争を進行させるといふ仕組みを考察した。そして、「人種差別」や「植民地へのまなざし」などポストコロニアル文学の特徴もこの作品に表れることを論じた。

最後に、今後の課題として、イーハトヴ童話『注文の多い料理店』に収録された作品「鳥の北斗七星」が戦後の杜陵書院版から削除されたこと、そして戦中（一九四二・三）に「雨ニモマケズ」が大政翼賛会文化部に徴用されたこと、という興味深い点を指摘しておきたい。同様に、「戦争中の国定教科書には、朝鮮や南洋群島や、満州、などの、植民地教材、があつたが、敗戦直後、それを墨塗りして消してしまつた」と川村湊が述べた。賢治作品の受容され方は戦争によって変わっていることが分かる。さらに、「童話」としての賢治作品は「児童・生徒は儀礼指導が容易でかつ儀礼的成果を確認しやすい」という特徴も持っている。このように徴用され、そして教科書化され、また削除された賢治作品の受容についてさらに考察していく必要があると思われる。よって、今後は賢治作品の受容も視野に入れて研究をおこないたい。

【注】

- (1) 萬田務は「宮沢賢治研究史」(『国文学 解釈と教材の研究』五月臨時増刊号 第三十一巻第五号 通巻四五一号 一九八六・五、学燈社)に宮沢賢治の生前における受容状況を「生前、ほとんど無名の存在であつた宮沢賢治が人口に膾炙されたのは、多分、昭和十四年、十字屋書店版全集の配本開始と、翌十五年、「風の又三郎」が日活によって映画化されてからであろう」と述べた。

(2) 佐藤泰正は『文学の力とは何か 漱石・透谷・賢治ほかにふれつつ』(二〇一五・六、翰林書房、三九五頁)に「言うまでもなく、明治三十七年、八年の日露戦争後の文学であり、漱石や自然主義文学などは、まさしくその戦後文学として登場したものであつた。またさらに言えば「戦後文学」という時、彼ら作家が戦争自体をどう捉え、これをどう描いたかという問題もまた、重要な視点のひとつとなろう」と述べた。

(3) 西成彦「森のゲリラ 宮沢賢治」(一九九七・二、岩波書店)

(4) 堀内丸恵『コレクション 戦争と文学 別巻 〈戦争と文学〉案内』(二〇一三・九、戦争と文学編集室)

(5) 境忠一「評伝 宮沢賢治」(一九六八・四、桜楓社、二一四頁)

(6) 安藤恭子『宮沢賢治〈へ力〉の構造』(一九九六・六、朝文社、六九頁)

(7) 西成彦「森のゲリラ 宮沢賢治」(一九九七・二、岩波書店)

(8) 押野武志『宮沢賢治の美学』(二〇〇〇・五、翰林書房)

(9) 大澤信亮『神的批評』(二〇一〇・一〇、新潮社)

(10) 宮沢賢治 イーハトヴ童話『注文の多い料理店』(一九二四・一二、杜陵出版部、東京光原社、『名著復刻全集』一九六九・四、近代文学館)

(11) 毛利嘉孝「カルチュラル・スタディーズとポストコロニアリズム」(『現代思想入門 グローバル時代の「思想地図」はこうなっている!』二〇〇七・二、PHP研究所)

- (12) 加藤陽子は『徴兵制と近代日本 1868-1945』(一九九六・十、吉川弘文館、七二頁)に「明治五(一八七二)年十一月二十八日の「全国徴兵ノ詔」は「今本邦古昔ノ制二基、海外各国ノ式ヲ斟酌シ」と述べているが、実質的には西欧の大陸諸国(フランス、ポロイセン、ドイツ)の制に学んだものだった。軍の部内史料だけではなく、一般にも普及していた書物などによってもそれは知られる」と述べた。
- (13) 梅原猛は宮澤賢治の作品を近代日本文学が生んだ近代西洋文明に対するもつとも鋭い諷刺の書と見る。例えば、「注文の多い料理店」に出た「びかびかする鉄砲をかついだすっかりイギリスの兵隊のかたちをした」紳士に関する描写は、ヨーロッパ文化を採用する人間に対する見事な諷刺であると論じた。
- (14) 宮澤賢治と諷刺精神」『群像 日本作家12 宮澤賢治』一九九〇・十、小学館)
- (14) エドワード・W・サイド『オリエンタリズム 上』(今沢紀子訳、一九九三・六、平凡社)
- (15) 三田牧「まなざしの呪縛―日本統治時代パラオにおける「島民」をめぐる―」(『コンタクト・ゾーンの人文学―Post-colonial／ポストコロニアル』田中雅一、奥山直司編、二〇一一・三、晃洋書房、二五頁)
- (16) 金子遊「辺境のフォークロア ポスト・コロニアル時代の自然の思考」(二〇一五・一、河出書房新社、六〇頁)
- (17) 三田牧「まなざしの呪縛―日本統治時代パラオにおける「島民」をめぐる―」(『コンタクト・ゾーンの人文学―Post-colonial／ポストコロニアル』田中雅一、奥山直司編、二〇一一・三、晃洋書房、二六頁)
- (18) 梅原猛「宮澤賢治と諷刺精神」(『群像 日本作家12 宮澤賢治』一九九〇・十、小学館)
- (19) 佐藤通雅「宮澤賢治の文学世界―短歌と童話―」(一九七九・一一、泰流社)
- (20) 加藤陽子は日中戦争について、「大蔵省預金部というところで課長をしていたエリート官僚の毛里英於菟という人が、日中戦争とはなんであるのかについて、一九三八年十一月に発表した論考があります。『東亜一体』としての政治力」と題して、「日支事変」(当時の呼称)は、資本主義と共産主義の支配下にある世界に対して、日本などの「東亜」の国々が起こした「革命」なのだ、という解釈を展開していました。台湾、朝鮮を含む日本、そして一九三二年に関東軍が背景にあって建国された「満州国」、それに、おそらく日本の占領下にある中国などを加えた総称として、毛里は「東亜」といつている。この東亜が、英米などに代表される資本主義国家や、ソ連などに代表される共産主義国家などに対して、革命を試みている状態、これが日中戦争だ、と。戦争ではなくて、革命だといっている」と分析した。(『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』二〇〇九・七、朝日出版社、二六四頁)
- (21) 「世界統一の天業」を提唱した田中智字はロシアの領土拡張を「国欲的な世界統一論」と批判し、日本の道義性を日蓮宗主義的な国体論によって正当化しようとした。皇室は「太古からの世界統一の王家」であり、日本は「世界統一の天業」を有する国家であり、日本人はそうした世界統一の使命を担う「天

業民族」であると強調している。日蓮主義は「明治後期から大正期にかけて、日本社会に広く普及し、流行思想となった」と大谷栄一が論じた。その原因は高山樗牛の日蓮論と本多が組織した日蓮主義ネットワーケだった。さらに、全国各地で学生、女性、一般民衆らによる日蓮主義サークルも日蓮主義普及の社会基盤となった。その上、出版メディアの力によって、日蓮仏教の単行本、樗牛の作品、智学の弟子の作品などを通じて日蓮仏教は一般民衆に普及し、大衆化した。賢治が活躍していた大正期に日蓮主義の黄金時代が到来した。(大谷栄一「田中智学と国柱会―日本による世界統一」というプラン」『講座 東アジアの知識人 第一巻』二〇一三・十、有志舎)

(22) 佐々木八郎『青春の遺書 生命に代えて この日記・愛』

(藤代肇編、一九八一・八、昭和出版)

(23) 例えば、澤井繁男は『鳥の北斗七星』考(二〇〇七・七、未知谷、一三頁)で「心根の大尉が山鳥を射殺めて前述の引用の心情吐露をするのはごく自然であり、人間愛に類比されるあたたかな愛が感得される。それはそのまま賢治の戦争観と言ってもいいであろう。つまり戦争に向かうにあたって抱かざるをえない、敵や味方に対する愛情に起因する理不尽である」と述べた。「理不尽」の「理」について分析が足りないと指摘しておきたい。

(24) 中野綾子「読書する学徒兵の起源―読書行為と感情表現装置としての日記」(『近代文学 第二次 研究と資料』第五巻、二〇一一・三、早稲田大学大学院教育学研究科)

(25) 火野葦平は戦場で中国の兵隊や土民があまりにも日本人に

似ていることを叙述した。(『土と兵隊 麦と兵隊 火野葦平戦争文学選第1巻』二〇一三・五、社会批評社、一四九頁)

(26) 「マジエル」は大熊座の学名「ウルサ・マジヨール」からの造語と推定されており、大熊座の一部である北斗七星が「マジエル様」の意味対象であると考えられる。タイトルとも重なるこの北斗七星は、仏教(密教)においては北斗の本地とされる妙見菩薩として信仰を集めており、賢治がここで北斗の本地とされる妙見菩薩をイメージさせようとしていたのか否かは別としても、何らか「信仰的絶対者」の存在を前提としていることは確かであると鈴木健司が分析した。(『ヘジヨバンニ』の行方―日蓮主義による世界統一の夢―)『宮沢賢治―多文化の交流する場所 第2回宮沢賢治国際研究大会記録集』二〇〇一・一二、宮沢賢治学会イーハトーブセンター、一六八頁)

(27) 川村湊『南洋・樺太の日本文学』(一九九四・一二、筑摩書房、七頁)

(28) 若林正文「一九二三年東宮台湾行啓と「内地延長主義」」(『岩波講座 近代日本と植民地2 帝国統治の構造』一九九二・一二、岩波書店、一〇五頁)

【附記】引用文中の傍線は、特に断りのない場合、引用者によるものであり、引用を略した部分については(中略)で示した。文献については、単行本や新聞・雑誌のタイトルを『』で示し、単行本や新聞・雑誌に掲載された文章のタイトルは「」で示した。定本は以下のテキストにした。イーハトーヴ童話『注文の多い料理店』(一九二四・一二、杜陵出版部、東京光原社、

『名著復刻全集』一九六九・四、近代文学館)

(ちよう・えいきよう)

千葉大学大学院人文社会科学部研究科博士前期課程二〇一六年修了)